

形容詞を伴う Way 構文の形成について*

金澤俊吾

1. はじめに

本論は、英語における形容詞句を伴う Way 構文の事例に関して、意味的および談話的特徴を考察し、各事例の形成過程の解明を目的とする。英語の Way 構文は、[V one's way PP]の統語連鎖により、主動詞の位置に make が典型的に生起し、主語の指示対象の漸次的移動を表すのが基本とされる (We made our way to the station. (Huddleston and Pullum 2002: 685))。また、同一の統語連鎖を用いて、主語指示対象の状態変化を表すこともできる。近年、形容詞を伴う、[V one's way to being AP]や[V one's way to AP]のような事例も見られる。先行研究では、[V one's way to AP]の事例が、結果構文からの新たな拡張事例として指摘されている (Luzondo (2014), Peña (2017)など)。しかし、形容詞句を伴う一連の Way 構文の事例の形成に関する分析が十分になされているとは言い難い状況にある。

2. 状態変化を表す Way 構文に関する先行研究

Way 構文に動詞 make が生起できるのは、目的語名詞句 one's way が「前進」の意を表すことに起因すると説明され、広く受け入れられている (Jackendoff (1990), Golberg (1995), 大室 (2018)など)。また、Luzondo (2014)は、Way 構文に本来生起し得ない、動詞 eat や elbow が生起できるのは、「上位のメトニミー」 (high-level metonymy) によって動機付けられると説明している。さらに、Luzondo (2014: 54)は、状態変化を表す Way 構文と結果構文は、「家族的類似性の関係」にあると主張し、結果構文と同様、Way 構文においても、主語名詞句の実体が新たな属性を得る変化を、形容詞句によって具現化できると説明している (They chewed their way loose.)。

金澤 (2025a)は、主語の指示対象の状態変化を表す事例[eat one's way to NP]の諸特徴を、結果構文の事例[eat oneself AP]との比較により考察している。この二つの事例は、いずれも「健康への影響」に関する状況を表している。このことから、Croft (2009)や Iwata (2020), 岩田 (2022)の分析を援用することで、[eat one's way to NP]の事例は、EAT フレーム内の healthy eating domain から喚起される状況を言語化し易いと説明している。また、動作の結果状態が、to+形容詞句や、形容詞句によって表される事例を指摘している (以下、例文中の太字は筆者による)。EAT YOUR WAY TO CALM (COCA, 2015) / Eat your way healthy (COCA, 2006)など)。さらに、金澤 (2025b)は、[drink one's way to NP]の事例によって表される、「飲む動作」と「結果状態」の事象間の関係を考察し、DRINK フレームを構成する healthy drinking domain または alcoholism domain から喚起される状況が、一連の事例によって言語化されると説明している。当該事例には、さまざまな動詞が生起していて、動詞 drink の下位語 sip や、飲み物名詞からの転換動詞 juice や wine などにより、健康状態の変化が表されている。

3. 形容詞 thin および overweight とその同族の形容詞が生起する V one's way の三つの事例

本論は、健康状態の一面である、「痩せる」状態を表す形容詞 (thin, slim, slender, lean, skinny) と、「太る」状態を表す形容詞 (overweight, portly) が、それぞれ生起する Way 構文の事例を考察の対象とする。当該形容詞が生起する事例を、コーパスや Google Books から収集し、三つの事例に下位分類し、各事例に生起する動詞の意味的特徴を中心に検証する。第一の事例は、[V one's way to being AP]であり、小説やダイエット本で主に用いられている。この事例には、主語の指示対象が、自ら身体に働きかける動作を表す動詞 think や sleep, exercise などが生起し、各動作の継続により、痩せていく状況が表されている (... she thought her way to being thin without a change of diet. (Matthew Hutson (2012) *The 7 Laws of Magical Thinking: How Irrationality Makes Us Happy, Healthy, and Sane*) / Isn't it nice that you can sleep your way to being thin and beautiful. (COHA, 2005) / So the first weight loss myth is that you can exercise your way to being slim. (Bruce Roseman (2015) *The Addictocarb Diet: Avoid the 9 Highly Addictive Carbs While*))。また、動詞 eat が生起し、主語の指示対象が、過度に食べることにより、過体重になりつつある状況が表される例もある (Then they get depressed and eat their way back to being overweight. (David Anthony (2015) *Own Your Body: Get the Body You Want by Learning How to Take Ownership of YOU Today!*))。

第二の事例は、[V one's way to AP]であり、前置詞 to に形容詞句が後続し、英文法の規範から逸脱した構造になっている。当該事例は、三つの事例の中で最も頻度が高く、使用域も最も広く、ダイエット本の解説文や、本のタイトル、本の章や節の見出しなどに使われる。また、この事例には、さまざまな動詞が生起できる。たとえば、動詞 play や sweat などにより、自ら体を動かし、痩せる状況を表すことができる (Play Your Way to Thin (Melinda Boyd and Michele Noonan (2012) *Train Your Brain to Get Thin: Prime Your Gray Cells for Weight Loss, Wellness, and Exercise / Sweat Your Way to Slim* (the book title))。また、動詞 fast は、食べる行為と断食を繰り返す文脈の中で用いられている (I am fasting my way to lean, strong, and healthy. (Kellyann Petrucci, Patrick Flynn (2013) *Fast Diets for Dummies*))。さ

らに、動詞 work により、徐々に太り始める状況を表すこともできる (Grant was genial, like there was good in the world, with gentle blue eyes and **working his way to portly**. (Peter McPhie (2023) *Good Man Gone*))。

第三の事例[V one's way AP]に関して、そのほとんどが、本のタイトルや、本の章、節の見出しに使われているのが特徴的である。他の二つの事例と同様、自発的に動く動作を表す動詞 step や、食べ物を消費する動作を表す動詞 eat などが生起し、痩せる状態に至るまでの動作の継続を表している (You actually “**step**” your way slim [...] with no more effort than climbing a flight of stairs. (*Weekly World News*, 1989/06/06) / **Eat Your Way Thin** (Melinda Boyd and Michele Noonan (2012) *Train Your Brain to Get Thin: Prime Your Gray Cells for Weight Loss, Wellness, and Exercise*))。

4. 形容詞を伴う Way 構文の形成に見られる諸特徴

前節での各事例の観察に基づき、形容詞を伴う Way 構文の形成に見られる意味的、談話的特徴として以下の三点を挙げる。第一に、Way 構文の事例[V one's way to (being) AP]の形成に関して、one's way に暗示される時間的長さと、結果状態表す to (being) AP との組み合わせにより、主動詞によって表される動作の継続が強調される事例と説明できる。また、一連の事例は、[V on one's way to (being) AP]と同様の意味的機能を担っていると考えられる。

第二に、[V one's way to AP]と[V one's way AP]に関して、英文法の規範から逸脱している点で、[V one's way to being AP]とは異なる。また、二つの当該事例には、広告で使われる言語と同様の属性を三つ確認できる (Leech (1966))。①命令文の形式が使われる傾向にある。Way 構文の当該事例に関しても、命令形を使用することで、本の内容が端的に表されることから、読者へのメッセージ性が強く、読者がさらに読んでみたいという意欲をかきたてる効果につながっている (**Sweat Your Way to Slim** (the book title))。②消費を表す動詞が使われる傾向にある。Way 構文の当該事例では、drink の下位語 (slurp, sip) や eat がこれに該当する。③肯定的な状態を表す事例が、否定的な状態を表す事例よりも頻度が高い (Leech (1966: 153))。本論では、「痩せて健康的な状態への変化」の意を表す事例が、「太って不健康な状態への変化」の意を表す事例よりも頻度が高いことによって確認できる。

第三に、[V one's way to (being) AP]と[V one's way AP]の各事例が、談話内で構築している関係について、[V one's way to being AP]の事例は、談話内で Landmark (LM)または Trajectory (TR)のいずれかの役割を担う傾向が見られる (cf. Langacker (1991))。一方、[V one's way to AP]と[V one's way AP]の各事例は、談話内で LM の役割を担う傾向が見られる。この二つの当該事例は、英文法の規範から逸脱し、形成されているので、新たな情報を談話内で補完することが必要とされる。たとえば、本のタイトルが LM として、副題が TR として、それぞれ機能し、情報が補完される例がある (以下、例文中の下線は筆者による。**Slurp Your Way to Skinny with the Newest Power Soup Diet: 90 Days of Fat-Burning Soup Recipes for Rapid Weight Loss and Muscle Building to Reset Your Metabolism** (the book title) / **Eat Your Way Slim and Enjoy Every Bite: Everything You Need To Know On How To Safely Reduce Your Weight And Enjoy What You Eat!** (the book title))。本の章や節の見出しの場合には、本文から情報が補完される例がある。さらに、[V one's way AP]の事例は、[V one's way to AP]の事例と比べて、談話内から補完される情報量が多く、それに伴い、より詳述性 (specificity) が高くなるという特徴が見られる (cf. Langacker (2008))。

*本研究の成果の一部は、JSPS 科研費 25K041740 の助成を受けてなされている。

参考文献・コーパス

Croft, William (2009) “Connecting Frames and Constrictions: A Case Study of *Eat* and *Feed*,” *Constructions and Frames* 1, 7-28. / Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago. / Huddleston, Rodney and Pullum Geoffrey K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge. / Iwata, Seiji (2020) *English Resultatives: A Force-Recipient Account*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia. / 岩田彩司 (2022) 「Eat one's way : 構文と意味論フレームの接点」松本曜・小原京子 (編) 『フレーム意味論の貢献 : 動詞とその周辺』86-104, 開拓社, 東京. / 金澤俊吾 (2025a) 「英語における Way 構文と結果構文に見られる状態変化について」, 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第13回公開ワークショップ研究発表. / 金澤俊吾 (2025b) 「Way 構文の多様性と創造性について—drink one's way を中心に一」, 日本英文学会中国四国支部大会第77回大会 招待発表. / Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Volume II*, Stanford University Press, Stanford. / Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford. / Leech, Geoffrey N. (1966) *English in Advertising: A Linguistic Study of Advertising in Great Britain*, Longmans, London. / Luzondo, Alba Oyón (2014) “Constraining Factors on the Family of Resultative Constructions,” *Review of Cognitive Linguistics* 12, 30-63. / 大室剛志 (2018) 『ことばの基礎2 動詞と構文』研究社, 東京.
Corpus of Contemporary American English (COCA): <https://www.english-corpora.org/coca/>